



Title	異説・日本近代文学
Author(s)	出原, 隆俊
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58082
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【29】

氏 名	いず 原 隆 俊
博士の専攻分野の名称	博 士（文 学）
学 位 記 番 号	第 2 4 2 5 5 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 22 年 11 月 19 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第2項該当
学 位 論 文 名	異説・日本近代文学
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 飯 倉 洋 一 (副査) 教 授 清 水 康 次 教 授 加 藤 洋 介

論 文 内 容 の 要 旨

大阪大学出版会から2010年1月8日に刊行された研究書『異説・日本近代文学』を博士論文として提出したもので、A5判で316ページに及ぶ。

本論文は、Ⅰ〈内部〉と〈外部〉、Ⅱ作品論再考、Ⅲ〈典拠〉と〈借用〉の三つの柱から、日本近代文学研究に新たな照明を当てたものである。これまでに必ずしも自覚的になされなかった切り口や、既成の作品論の枠の思い切った組み換え、知られていなかった事実の発掘を中心としたという意味で「異説」を表題に謳っている。

Ⅰでは、人間の行動を抑圧したり推進したりするもの、それが〈内部〉にあるのか〈外部〉から来るのかということが、小説内に登場する人間たちのありよう、あるいはその小説の形態に大きく関わってくることを明らかにし、〈内部〉と〈外部〉の枠組みは、〈個〉と〈社会〉、〈意志〉と〈運命〉、〈自由〉と〈道徳〉、〈精神〉と〈物質〉などの様々な局面において適用できることが示され、こうした〈内部〉と〈外部〉の枠組みを意識することで、本来異質なはずの文学者間の思いがけない類似性を見出すことや、一人の作家における意識の変化を捉えることが可能になることを浮かび上がらせた。

具体的な考察対象として北村透谷、泉鏡花、夏目漱石、三島由紀夫を取り上げ、彼らの作品を〈内部〉と〈外部〉の観点から検討することで、新たな読みを提示したり、作品の位相を測定することができることを示した。

Ⅱでは、五つの作品を論じ、従来の読みや文学史への異説を唱える。樋口一葉『にぎりえ』論では、本文中の〈彼の人〉が従来見誤られていたことを指摘することで、ヒロインお力の置かれた状況、決断の意味、心情を新たに読みなおす。森鷗外の『高瀬舟』論では、作者が「縁起」で示した〈安楽死〉と〈知足〉というテーマは偽りではなかったかという結論を導く。夏目漱石『心』論では、テキスト内の様々な言葉の連鎖を追うことで、Kの代理としての私を浮上させる。三島由紀夫『金閣寺』論では、その構成意識を読みぬくとともに、太宰治の『人間失格』の影響を指摘する。『妾薄命』論では、同作品が「下流社会」に密着した形で鷗外『舞姫』の反対の位相から『舞姫』の位置を照らし出したことを指摘する。

Ⅲでは、近代文学における〈典拠〉と〈借用〉の実態を指摘し、その意味を考察した。具体的には、北村透谷の『他界に対する観念』の発想の由来がレッシング、シラー、シュレーゲルの三者のドイツ文学・美学評論の英訳本にあること、樋口一葉の『にぎりえ』が同時代の様々な作品から〈借用〉していること、漱石の『心』が鷗外の翻訳作品を用いていることなどを指摘、近代文学において、従来考えられていた以上に、〈借用〉や〈引用〉が頻繁に行われていることを立証し、作品相互の繋がりが予想以上に緊密であることを明らかにした。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

題目「異説・日本近代文学」が示している通り、本博士論文の特徴は、近代文学研究の定説に対し、さまざまな〈異説〉を提示する諸論文を集成した点にある。

本論文の評価すべき点は、まず、作品に〈内部〉と〈外部〉という枠組みを当てはめていくことで、従来見えなかった近代文学における人間存在のありようの描写として、作品を浮かび上がらせたことである。とりわけ概論に相当する「〈内部〉と〈外部〉という問題—日本近代文学の一面—」は、森鷗外から大江健三郎まで、近現代の諸作家・諸作品が、〈内部〉と〈外部〉という観点から縦横に論じられている。

次に、一見奇抜な異説を提示しながら、定まった読み揺さぶりをかけ、読みの面白さを示して見せたことである。特に「彼の人」を従来の読みとは全く違う登場人物に当てはめて作品世界を一新させてみせた「樋口一葉『にぎりえ』の〈彼の人〉」や、〈安楽死〉の是非というテーマそのものを転覆させてみせる「森鷗外『高瀬舟』異説」などは、研究史上に残る作品論であろう。

また、申請者は、作品を論じるにあたって、同時代の有名無名の作品・文献を渉猟し、それらの読

解の上に立って当作品の位相を探るという方法を開拓し、多くの成果を上げているが、特に、当作品が同時代の先行作品をいかに〈借用〉しているか、その実態を明らかにしたことは特筆すべきである。

このような優れた達成の一方で、問題点がないわけではない。三部構成を「異説」というキーワードで括るにはいささか無理があること、〈内部〉と〈外部〉の問題が必ずしも整理された形で提示されていないということ、典拠論においては細部まで一致するということが客観的に認めがたい部分が残ること、作家や作品での〈借用〉のあり方の違いを追求しきれていないことなどである。

しかし、それらの瑕疵は、本論文の、テキストをまるごと読みぬくという強い意志に貫かれた高度な読解を損なうものではない。よって本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。